０８／０９／２１　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：救いは信仰のみによる１
聖書箇所：ローマ人への手紙　３章２１－２６節

パウロはこれまで、人間とはいかに罪に汚れた者であるかを立証して来ました。性質においても言動においても、聖い主なる神に逆らい、主が忌み嫌われることを進んで行ない続けている罪に汚れ切った罪人、それが私たちであると。汚れた自分を聖くしようとどんなに試みても罪に対してはどうすることもできない者だとパウロは私たちに訴え続けたのです。ですから、私たちが前回見たように、この３章の中で、**「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」**（３：１９）とある通り、この宣言ほど神に逆らいその救いを拒んでいる罪人にとって、戦慄を覚えるものはありません。また、同じように２０節にある**「律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。」**という宣言ほど罪人にとって絶望的なものはありません。そこには一縷の希望もないからです。パウロはそのことを私たちに徹底して教えて来ました。私たちの問題は私たちが自分のことを正しく知らないことです。私たちは自分は罪人だと言いながら、あの人よりは勝っているとか、あの人より私は正しく聖い者だと、どこかで思い込んでしまっています。パウロは間違ってもそのようなことが読者たちの間に起こらないように、徹底して、私たちが本当はどのような者であるか、私たちの醜さを暴露して来ました。これはパウロ自身の姿であり、そしてまた、私たちの姿です。どうすることもできない罪人、聖くなって行こうという願いは神から与えられているけれど、どうしてもそのようになって行かないで失敗に失敗を重ねる私たち、自分に嫌気がさすような私たちです。もうできることはありませんと医者から見離された末期的症状の病人が、その病気を克服することが出来ないように、すべての人間は生まれながらに罪から救われることに関する希望を持っていません。自分ではどうすることもできないのです。皆さん、そのことを私たちがしっかり理解していなければ、これからパウロが教えて行く神の恵みのすばらしさが分からないのです。だれ一人として例外なく、神のあわれみを受けて当然の人間はいないということです。ここにいるすべての人、全世界のすべての人、人類の歴史のすべての人は神から永遠のさばきを受けて当然であり、神の怒り、神ののろいを受けて当然な罪人であって、だれ一人神のあわれみを受けるほど正しい聖い者はいないのです。そのことをパウロは繰り返し私たちに教え続けたのです。

今日、私たちは３章２１節から見て行きます。

☆新しい教え、

これらのことを話した後、このように言います。２１節**「しかし、今は、…」**と。なぜ、このことばが大切なのでしょう？パウロはここでこれまでの話から一変させるのです。これまでのことと対比して新しいことを教え始めるのです。救いに関してまったく希望のない罪人に、これから希望のメッセージを知らせようとするのです。確かに、だれ一人として救いに値する者はいない、しかし今、神が私たちの想像を越えたことをしてくださった、私たちにもっとも相応しくないことを主はご自身の愛とあわれみをもってしてくださったと、パウロはここから話はじめて行くのです。

１．神があなたを救ってくれる　　２１節

ａ）希望のない私たちに神は希望をくださった

今、私たちが見て来たように、罪に関してまったく救いの希望をもっていなかった私たちに、神は希望をくださったのです。よく考えてみると、信仰生活は神からの希望に溢れていませんか？もし、この主が私たちの神でなければ、私たちは様々な出来事において希望をもつことができません。どんなにポジティブに物事を見よう、楽天的に見ようとしても限界があります。人間の力では問題を解決することができません。一時的にそこから逃避することができても、そこに本当の希望を見出すことはできません。それが神を除いた人々ができることと、私たち信仰をもっている者ができることとの根本的な違いです。世の中の人々は神を除いてそこに希望を見出そうとしますが不可能なことです。その証拠は、一番肝心な救いに関してどうすることもできないことです。どのように自分勝手な考え、自分勝手な希望をもっても、その人は永遠の滅びに向かいます。私たちの周りにはたくさんの問題があります。多くの人たちは将来のことを考えて不安を感じます。失職だけでなく、定年という現実を迎えるときその後の生活に不安を感じている人たちはたくさんいます。しかし、私たちクリスチャンはその現実をしっかり見てそこに希望をもちます。神の約束に立ちます。神は必ずすべてのことを導き、すべての必要を満たしてくださると、その約束に立つとき私たちは問題の中にあっても期待をもって、希望をもって生きることができるのです。これはただの考え方ではありません。

子どもたちを学校に送っている親たちは、学校が非常に荒れた状態にあって、親も親学を学ばなけれ

ばならない時代になっていると言います。そのような学校に子どもたちを送り出していることに不安を抱えている方がたくさんいます。もし、神を知らなければ不安で仕方ありません。しかし、私たちは感謝なことに、そのすべてを知っておられ、その上で私たちに子どもたちを託してくださった神に彼らを委ねることができます。私たちに託された子どもたちは私たちの私物ではなく神のものです。私たちは少なくとも、そのすべてのことを知ってその全能の力によってみこころを為される神に委ねることができます。高齢者の問題が言われています。多くの人々は自分の親のことを考えて、後に彼らの介護、世話をしなければならないのではないか、また、親の方も子どもたちの世話にならないようにと思いやりの心をもっても、日々衰えを感じています。ですから、子どもたちも親たちもともに将来を見てどうなって行くのだろうと恐れをもっているかもしれません。イエスを知らなければこれは大きな問題です。できるだけそのことを考えないように、それを避けようとしますが、解決はありません。しかし、クリスチャンである私たちはその中にあっても、神がすべてのことをご存じだということが私たちに希望をもたらしてくれます。確かに、不安が心をよぎることがあるかもしれません。でも、その中で私たちは最善のことだけを為される主にすべてのことを委ねることができます。そのように考えて行くと、期待が生まれてきます。神はどのように私たちを導いていってくださるのかと。現実には、私たちは日々肉体の衰えを痛感しています。死という問題がだんだん現実のものになって来ています。でも、私たちクリスチャンは、その現実を見て恐れるのではなく、主は私を生かしてくださっているからこの中でどのように用いてくださるのか、信仰者はこのように期待するのです。私たちは力の源である神に自分自身を委ねて歩んで行くことができるのです。主よ、どうぞ私を使ってくださいと、神はそのような人々をこれまでも使って来られたし、これからも使って行かれます。

ｂ）天を待望しながら今日を生きることができる

　同時に、私たちは死という問題に関しても「天」というすばらしい約束を待望しながら、今日を生きることができます。私たちはそこで私たちの愛する主にお会いし、そして、罪を犯すことのない栄光のからだをいただけるのです。ですから、クリスチャンは神を知らない多くの人たちにとって悩みの種であることが、大きな期待なのです。そのことを私たちは覚えなければいけません。ですから、私たちは神のみことばを学んで行くと、神のことばは私たちに重荷を与えません。希望、期待を与えます。神のみこころや神の命令を知るたびに、私たち信仰者は主が私たちをこのような信仰者へ変えようとしておられるのだという、その事実が私たちの心に期待と喜びをもたらしてくれるのです。神があなたを変えると言われたなら、私たちはそのような約束が私に与えられたその事実によって期待をもちます。神が言われたことだからです。神は私を変えてくださり、私の必要を満たしてくださり、このような私を通してご自身の栄光を現わしてくださると、そのような約束を見るたびに私たち信仰者はハレルヤ！と言います。こんな私を神は変えて行って、みこころを為してくださる、神が用いてくださると。ヨハネは**「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」**と言った後、**「その命令は重荷とはなりません。」**と言いました。Ｉヨハネ５：３のみことばです。なぜ、重荷ではないのでしょう？なぜなら、神のみことばは私たちに神のみこころが何で、神がどのようなことを私たちに望んでおられるのか、どのように生きて行くべきかを教えてくれます。しかも、それを実現させてくれるのは私たちの力ではなく、神の恵みなのです。皆さんの憧れの場所を神は示してくださってそこに連れて行ってくださるのです。ですから、神のみことばを聞くとき、私たちは神はこのような人に私を変えようとしてくださっていることが分かります。そのことを知っているクリスチャンたちは神のみことばを重荷とは感じないのです。神のみことばは私たちに期待をもたらすのです。主よどうぞ、そのような者に私を変え、私を用いてくださいと。これは楽天的な考え方をするということではありません。これはキリスト者的考えによる生き方なのです。クリスチャン的な考え、クリスチャン的な生き方なのです。そのことが分かっていなければ、クリスチャンたちは神のみことばに反して、神の命令はあなたにとって重荷となるのです。もちろん、あなたが神のみこころに従いたくないとしているなら、神の命令は常に重荷です。神のみこころを知りたくないとしているなら、神のみこころを聞くことはあなたにとって苦しいことです。ここに来ることを喜びとしないで集まって来た人は、神のみことばを聞いているとしんどくてたまらないです。それは、あなた自身が神に従おうとしていないからです。でも、感謝なことは、私たちが神に従おうと神の前に心を開いて、どうぞみこころのままに私を導いて行ってください、そのように生きて行きたいから私を助けてくださいと願い歩み出すなら、私たちは神の祝福をいただきながら毎日を歩み、そして、神のすばらしさを世に証できるのです。私たちはそのために生きているのです。私たちは自分の楽しみのために生きているのではなく、この地上にあって、こんな私を救ってくださった神のすばらしさを証するために生きているのです。そして、その生き方を実践するためには、今私たちが見て来たことを自らが実践する以外には何もありません。ですから、神はいつも私たちに希望を与えてくださるのです。絶望と思える中にあっても希望をくださる、罪の中にいてどうすることもできない、永遠の滅びの日を待つしかない

私たちに神は働いてくださって私たちにすばらしい救いという希望を与えてくださいました。そのことをパウロはこの２１節の初めから伝えようとするのです。**「しかし、今は、」**と…。希望のない私たちに神はすばらしいことをしてくださったのです。

２．信仰による救い

２１節はこのように続きます。**「律法とは別に、」**と。明らかに、これまで話してきたことと、これから話すことを対比しています。律法によるのではない、律法とは関係ない、律法とはまったく別の、ということをパウロはここから話をしようとしています。律法とはすでに見て来たように、旧約聖書を指していますが、もう少しその範囲を限定して「モーセの律法」と考えたとしても、ここでパウロが言わんとしていることは、これまでの人々はこのように神の教えを守り行なうことによって救いを得ることができると考えていたということです。神の教えを守りさえすれば神は私たちに救いを与えてくださるだろうと。パウロはそれとはまったく違う救いを神は備えてくださったと言うのです。律法を守ることによって救いを得ることは不可能だということは、私たちはすでに見て来ました。ですから、人間の行ないによる義と、神により与えられる義、別の言い方をするなら、人間の行ないによる救いと神による救いが対比されているのです。すでに、１：１７で「義」について学びました。**「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」**と。「救い」ということです。パウロはここで、今は救いの道がはっきり示された、それは人の行ないによって勝ち取るのではなく、神により与えられるものであり、信仰による救いだと言います。ローマ４章にはアブラハムのことが出て来ます。パウロはこの救いのすばらしい恵みを、このような実例を使いながら説明して行きますが、４：２－３にはこのように記されています。**「もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。:3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。」**、まさにこのことをパウロはこの３：２１から教えようとしたのです。人々は神の教えを一生懸命守って行くことによって救いを得ることができると考えて努力をしましたが、そこには期待していた救いはありませんでした。そのようなことで神の前に罪に罪を重ねてきた罪人に、神は信仰による救いを明らかにしてくださったと言うのです。行ないによる救いの問題、いったい人間はどうしてこの行ないに頼りたがるのでしょう？私たちの周りにあるたくさんの宗教は行ないを重視しています。これだけのことをしたから神は聞いてくださる…と。根底にはご利益宗教がはびこっているのです。これだけのことをしたなら神はきっとこういうものをくださると。

一人の裕福な青年がイエスのもとにやって来て、イエスにこのような質問をします**。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」**と。マタイ１９：１６のみことばです。このような考え方を人々はもっていたのです。救いを得るだけの正しい行ないを実践できる、自分で自分を救えると信じ込んでいるのです。なぜなら、自分は欠陥だらけの人間だと確信している人がこのようなことが言えるでしょうか？**「どんな良いことをしたら…、永遠のいのちを得ることができるでしょうか」**と。私たちが言いたいことは、神さま、行ないを条件にしないでください、もし、良い行ないをしなければいけないのなら、私は救いを得ることはできないからと、私たちは自分のことが分かるほどにそのように言うはずです。しかし、この青年は**「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」**と、救いを得るための良いことが自分は出来ると信じ切っているのです。ローマ１０：３に**「というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」**とある通りです。自分の力で救いを得ようとしている、自分の力で神の前に正しい者になろうとする、聖い正しい神の前に、心を入れ替えて一生懸命行なうことによって、堂々と立つことができると思っている、だから、間違っているというのです。人間というのは非常に高慢でありプライドが高いと言います。できないことをできると信じ切っているからです。パウロはどんなにすばらしい行ないをしても、どんなに頑張って教えや言い伝えを守ったとしても、そのような行ないでは救いに到達しないことを断言しているのです。なぜなら、すべての点で完璧に教えを守ることはできないからです。ガラテヤ３：１０でパウロはこのように言っています。**「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**と、こののろいから逃れることのできる人はいるでしょうか？条件はただ一つ、すべての教えを堅く守って実行しなければいけないのです。

ヤコブも同じことをヤコブの手紙２：１０でこのように言っています。**「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」**と。完璧な神に受け入れられるためには完璧でなければならないのです。１００点で受け入れる神は９５点では受け入れないのです。９９．９でもだめなのです。完璧な方の前に立つには完璧でなければいけないのです。ですから、ヤコブが言ったように、一つの点で失敗するならそれ以外全部守れたとしても、あなたは神に受け入れられることはない、

あなたは罪を犯したと神はご覧になる、あなたは汚れていると神は言われると言うのです。義を、救いを必要としているのは罪人の私たちです。神の赦し、救い、神によって義と宣言されること、それを必要としているのは私たち罪人です。では、なぜこの救いが必要なのでしょう？当然のことですが、神に対して罪を犯してきたから、神からの赦しをいただかなければいけないのです。

そこで私たちが考えなければいけないことは、神が私たちに提示してくださった方法によって赦しを求めようとしているのか、自分勝手な方法で赦しを求めようとして自分勝手に赦しを得たと思っていないのかどうかです。神の赦しをいただくなら、神がこのようにしなさいと言われることに従うのが当然です。神による救い、神の救いが私たち罪人には必要です。自分自身では決して罪から完全に離れ罪から完全に聖くなることができないから、神の助けが必要なのです。

３．神の義が示された

３：２１に戻って、パウロはこのように言います。だから**「神の義が示されました。」**と。律法とは別に神がされたことは、行ないによる救いではなく神の義を示したことです。**「示されました」**とは、すでに見たように「目に見えるようになる、明白にする」、特に、ある辞書では「キリストによって明白にする、現わす」と定義しています。つまり、パウロはここでイエス・キリストによって救いが人々の前に明白になった、明らかになったと言うのです。キリストの誕生、その十字架の死、また、死よりの復活を通して、この神の義、救いがどのようなものであり、どのようにしていただくことができるのか、それを私たちに明らかにしてくれたと言うのです。もうすでに、私たちは１：１７でこの神の義について学びました。２１節でパウロが**「律法とは別に、……神の義が示されました。」**と言いましたが、律法、かつての私たちは一生懸命正しい行ないを積むことによって救いを得ることができると考えていましたが、パウロはそうではない**「神の義が示されました。」**、神が備えてくださった救いの道、神から私たちに明らかにされた救いの道、これこそが罪人の私たちに希望をもたらすと言います。なぜなら、この神が示してくださった方法によって私たちは自分の力では到底得ることのない救いを得ることが可能となったからです。ですから、恐らくパウロはこのことを記しながら、１：１７で**「義人は信仰によって生きる」**と宣言したことを、声高らかに、まさに神は私たちにできないこと、私たちに不可能なことをしてくださった、どんな罪人でもイエス・キリストを信じる信仰によって義とされる、救われる、罪の赦しが与えられる、ここに大きな希望があるのだということを言うのです。

４．旧約の時代から教えられていること

同時にパウロは、この教えは過去の人々がまったく知らなかった教えではないということも教えています。ですから、**「しかも律法と預言者によってあかしされて、」**と言いました。つまり、彼が言いたいことは、これから彼が教えようとしていること、この救いの希望というのは旧約の人々は知らなかったことではない、実は、旧約の中に教えられていたことだと言います。先ほどの１：１７のみことばはハバクク２：４の引用でした。旧約聖書の中にそのようなすばらしい勝利宣言が記されているのです。**「見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」**と。ですから、信仰によって救いをいただくという教えは旧約聖書になかったわけではありません。また、先ほども見たローマ４：３、７－８のみことばは旧約聖書からの引用です。**「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」**（創世記１５：６）からの引用です。アブラハムは神を信じるその信仰によって救いを得たのです。何かの特別な働きに拠ったのではないのです。ダビデもそうでした。ですから、パウロはこの教えは新しい教えではないと言うのです。イエスが復活した後、イエスはエマオに向かう二人の弟子たちと行動をともにされましたが、そのときにイエスは彼らと話をされました。ルカの福音書２４章に出て来ることですが、そのときに、２７節にこのように記されています。**「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」**と。この二人の弟子たちに彼らがまだイエスの救いのことが正しく分かっていなかったゆえに、イエスはこのように旧約聖書を使ってご自身について明らかにされたのです。ですから、救い主が来ることは新しい教えではなかった、旧約聖書が教えていることです。同じルカ２４：４４に**「さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」**とあります。このようにこの教えは旧約聖書に見ることができるのです。救世主が来るということは創世記３章からも、また、皆さんがご存じのイザヤ書７：１４、９：６、１１：１でもそのことを教えています。７：１４**「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」**、９：６**「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」**、１１：１**「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」**。

ガラテヤ人への手紙４：４で**「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から**

生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」と教えています。**「定めの時」**とは神の決められたとき、神がお持ちだった計画に基づいてということです。神のご計画に従って神はこのご自身の御子をこの世に遣わされたのです。神は世界を造る前からすべてのことを決めておられたのです。そして、神はこのように約束どおりに救い主を送ってくださったのです。旧約聖書のエゼキエル書３６：２６－２７を見てください。**「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」**と、エゼキエルはこのようなことを預言したのです。人々の中に新しい心が与えられるのです。私たちが何かをしたからではなく、神が働いて神が私たちに新しい心をくれるのです。よく見て行くと、その新しい心をいただいた人たちは**「わたしのおきてに従って」**歩む人たちです。神の教えに従って歩む者であり、神の**「定めを守り行なう」**者です。

なぜ、このような生き方をするのでしょう？この人たちのうちに新しい心が与えられたからです。新約聖書の中にそのようなことを耳にしませんか？私たちは新しく生まれ変わった者として、どのような生き方をする者となったのでしょう？私たちは神を愛し神のみことばを愛し、みことばに従って行こうとする者に私たちは生まれ変わりました。イエス・キリストを心から受け入れる者たちは、そのように神のみこころに喜んで従って行こうとする者たちです。なぜ、そのようなことが起こるのでしょう？それは私たちの心が新しくされたからです。この教えは新約聖書の中に初めて出て来たのではありませんでした。旧約聖書の中に出ていたことです。神が人々に新しい心を与える、救いは神からの贈り物なのです。私たちの行ないによって私たちが獲得するものではありません。神が一方的にあわれみをもって、私たち、イエス・キリストを信じる者一人ひとりにその救いを与えてくださるのです。私たちは新しい心をもって生きる者になるのです。神を愛し神に従う者へと生まれ変わるのです。ですから、パウロはこのようにしてこの教えがまったく新しいものではないということを明らかにしました。旧約聖書はこの真理を教えていました。救世主が来ると、どの家系に、どこで生まれ、どのようなわざを為し、そして、私たちにどのような希望をもたらすのか…。

もう一度ローマ書に戻っていただいて、パウロは２２節で続いてこのように言います。**「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」**と。私たちは次回、このイエス・キリストを信じる信仰によって神の義とされること、つまり、信じる信仰によって救われるということ、その救いに与る信仰とはどのような信仰なのか、そのことを見て行きます。私たちはそのことをしっかり見なければいけなせん。なぜなら、これこそ神の義、神の救いをいただく唯一の神の方法だからです。２２節を見ると、この神の救いは**「すべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」**、民族的な人種的な差別はない、信じるすべての人にこのすばらしい救いを神は与えてくださると言います。かつて、ユダヤ人たちはこのように言いました。「我々は特別だ、我々は神からすばらしい契約をいただいた、我々は選ばれた民だから」と。パウロは言いました。「人間はすべて罪人だ」、そこには民族も人種も関係ない、みな、神の前に罪を犯していると。そして、パウロは今、このように言います。ゆえに、すべての人はこのイエス・キリストを信じる信仰によって救われると。クリスチャンの皆さん、これが私たちが神からいただいた希望です。このようなすばらしい希望を神は私たち信じる者に与えてくださったのです。私たちは声を高らかにして、パウロが１章で言ったように、**「義人は信仰によって生きる」**と言います。イエス・キリストを信じる信仰によって罪が赦される、そして、感謝なことに、私はこのイエス・キリストによって罪が赦されたと、このことを誇りながら、このことを感謝しながら、そして、この主を心から称えながら生きて行くのです。このように希望をもって生きなさい、しっかり天を見上げて今日を生きなさい、様々な思い煩いをいっさい主に委ねて生きなさいと、なぜなら、私たちにとって一番大きな問題を主は解決してくださったからです。その神が私たちにその全能の御手をもって、全知の知恵をもって導きを与え続けてくださるのです。救われた皆さん、感謝です。このような祝福を神はくださったのです。希望を持って今日を生きることができ、希望をもって永遠を過ごすことが出来るのです。この主が誉め称えられ続けるように、また、この主のすばらしさが宣べ伝えられ続けるように、今日を生きて行くことです。